

術は2022年4月に保険適用されました。私は23年1月、当大学に赴任し、早速、このロボット支援手術を実施しました。現在では、当教室の医師の多くはロボット支援手術のダビンチの術者資格を取得していることが、診療科の特徴となっています。

員ならだれでも参加できることもできます。指導医がただ解説するのではなく、互いに意見を交わすのがポイントです。個々の事例を自分のこととして捉え、次の手術に存分に生かしてほしいからで

高知大学医学部外科学
講座（消化器外科学、小児外科学）の瀬尾智教授
は、肝がんのロボット支援手術やプロジェクトショ
ンマッピングを使った開腹手術など、最先端の医
療を相次いで導入してきた。一方で地域とのつな
がりを大事にし、顔の見える連携をモットーにし
ている。教室運営の取り組みを聞いた。

われわれの世代は上級医の手術を間近で見るオレン・ザ・ジョブ・トレーニングでしか術式を学べませんでした。ロボット支援手術を若手に任せられるようになつた背景には、オフ・ザ・ジョブ・トレーニングの活用があります。

当教室では腹腔鏡下手術も開腹手術も録画し、

講座クローズアップ

高知大学医学部 外科学講座 (消化器外科学、小児外科学)

医療は最先端を、地域には足を運んで

高知大学でも工学部との医工連携に力を入れ、ここで開発した治療・デバイスで高知県民に最新の医療を提供したいと考えて います。

してたわいのない話をして帰ります。そうすることとで病診連携をいい形で継続できますし、これこそ教授がやる大事な仕事だと考えています。

これは、プロジェクトシヨンマッピングの技術を用いて、近赤外蛍光観察で得られた体組織の血流情報などを直接、臓器に投影する仕組みです。モニターと患部を交互に見ながら手術すると視線の移動が大きく、むしろ危ない。しかし、この仕組みだと患部に集中し、手術の安全性を向上することができます。

MI-PS (Medical Imaging Projection System) の開発に携わり、薬事承認、販売開始までを経験しました。

私は前任の京都大学では、国立研究開発法人日本医療研究開発機構（AMED）の支援を受けて、

て、基礎医学と臨床医学を密接に融合させた研究の採択を目指します。

高知大学では今、基礎医学分野でベテランから50歳前後の医師へ代替わりするケースが増えていきます。この環境を生かし

す。ただ、トレーニングは毎回1時間のみに限定します。ダラダラせず、内容の濃い1時間を目指しています。

——高知は高齢化と医療の
偏在が課題です。



せ お さとる
瀬尾 智教授

1996年福井医科大学(現:福井大学)医学部卒業。大阪赤十字病院、三菱京都病院消化器外科医長、京都大学医学部附属病院肝胆臍・移植外科准教授などを経て、2023年から現職。